

仔猫とハト時計

なかじょう ゆき

「コチ、コチ、コチ、カチツ、

かへにかかった時計の長いはりが、真上に来ました。

ポッポー、

小さな木の窓が開いて、ハトが飛び出し、かくんと下向きになって部屋を見下ろし、顔を上げ、窓の中へ引っこみました。けれども、

ポッポー、

次に出た時は、下を向いたまま止まってしまいました。やがて、歯車のギーギーきしむ音と共に、ガタガタ窓枠にぶつかりながら中に引っこみました。百年近くも前から動き続け、この家の出来事を見てきたハト時計です。新しくなった頃のように動けなくなっています。

夕焼けの色が、部屋の中までほの赤い色にそめています。

……くうふう、すうふう、くうふう、すうふう……

窓辺のベッドには、おじいさんがもう幾日も前から眠りこんだまま、大きな息を吸ったり吐いたり、を繰り返しています。

おばあさんはベッド脇のいすに座ったまま、ハト時計の音にも気づかず、くくん、くくんと居眠りしています。でも、おばあさ

んのひざの上で、いっしょに寝ていた仔猫は、耳をピンツと立てて顔をあげました。

ポッポー、

またハトが飛び出しました。それは仔猫がいつも転がしたり追いかけていたりしているピンボン玉より小さいくらのハトです。

仔猫は、くくんとつばをのみました。おしりをもそもぞっと動かし、時計の真下にあるタンスの上に跳び乗って、次にハトが出てくるのを待ちかまえました。

ポッ……

仔猫はビヨン、とジャンプして、飛び出してきたハトに跳びかかりました。

えっ?!

何が起こったのか、仔猫にはわけがわかりません。仔猫はハトの小さなくちばしにくわえられて、小さな窓の中に引きこまれていたのです。

時計の中は真っ暗で、歯車のギーギーきしむ音が響いているだけです。けれども、ずっと先の方には黄昏色の明かるい世界が広がっていました。ハトは仔猫よりも大きな姿になって、仔猫の首にまかれている青いリボンをくわえたまま、ぐんぐんその方へと羽ばたいているのです。

やがて、果ても見えない広い川がどうどうと流れる岸辺に、ハトは降り立ちました。びっくりして目を丸くしたきりの仔猫も、ごうごうと石ころだらけの川原におろされていました。

仔猫はキョトキョトとあたりを見回しました。

「そこの小舟が杭につながれ、綱をふりほどきたがって、ゆう

らゆらとゆれています。

長いさおを持ち編笠をかぶった男が、川原を歩き回りながら、

「おうい、おうい！」

と、高い葎の茂みに向かって声を張り上げています。

「あれはだれ？」

仔猫はハトに尋ねました。

「あれは渡し守。この大きな川の向こう岸まで、人を乗せて運ぶの。」

「ふうん、この川の向こうに岸があるんだ。さっき飛んでるときには、見えなかったね」

「あの舟で渡してもらわないと、ぜったいに見えないのよ」

ハトが答えたとき、しげみの中から、ふらふらとおじいさんが現れました。

「あれっ、あのおじいさん」

仔猫はびっくりして、ハトを振り返りました。

「そう、あのおじいさんよ」

ハトは首をふりふり答えました。

「だって、おじいさんは寝たままだよ。歩けるはずないよね？」

ハトは、

「歩けないのはおじいさんの体のほう。だけどおじいさんのたましいは、体からぬけだして自由に動き回れるの。これからおじいさんは川を渡って、向こうの岸にある次の世界に行くところなのよ」

と、仔猫に教えました。

そのとき、おじいさんを見つけた渡し守が、

「じいさん！」

と、野太い声で叫びました。

「早く舟に乗るんだ。もう時間がない」

渡し守はおじいさんをせかしました。ところがおじいさんは、待ってくれ、お願いだ、待ってくれ。まだ渡れない。忘れた物があるような気がするんだ。でも、それがなんだったか、どうしても思い出せない。このまま、あちらには行かれない」

おじいさんは頼みこんでいる間にも、何かを探してそこらをさまよっていました。小さな仔猫にも、おじいさんがこれきり向こうに渡ってしまったら、その先ずっとくよくよ悲しまなくてはならないことがわかるような気がしました。

「おじいさんは何を探しているのさろっ？」

仔猫もまた、おじいさんの忘れ物が落ちてやしないかと、小石の間を見い見い、さまよい歩いてみました。

「あっ」

仔猫の頭の上で、おじいさんの声が聞こえました。仔猫が顔を上げると、

「これは、ああ、なんてことだ、これはたしか」

おじいさんが仔猫をだきあげました。そして、仔猫の首に巻か

れている青いリボンをなでながら、
「間違いない、これはわしのネクタイだったものだ。おばあさんがわしの誕生日に贈ってくれたネクタイだった布だ。ぼろぼろになるまで使ったから、とっくに捨てたろうと思っていたの」

見る間に、おじいさんの目のふちから、顔に刻まれたしわの溝をつたって、細い涙の糸が流れ落ちました。

「思い出したぞ。わしが忘れていた物を」
でもそのとき、

「時間だ」

渡し守がおじいさんの腕をガチッとつかもつとしました。

八下が、今度はおじいさんの覆巻きの襟をくわえ、ばさつと飛び立ちました。広げた翼がおじいさんを包みこむほど大きくなっています。

おじいさんの手の中から川原を見下ろした仔猫は、おどろきまじった

渡し守は、さっきおじいさんへと手を伸ばしたままのかつこうで、びくりとも動きません。そればかりか、あの広い川の流れもが、ピタッと止まってしまっているのです。

八下は真っ暗な方向へと飛びました。闇の中をしばらく飛ばると、ギーギーという音が聞こえ始め、小さな窓のわくからもれるほの赤い光が見えてきました。

パンッ、

八下は窓に頭をぶつけて扉を開け、くちばしを開きました。おじいさんがゆらりと下に落ちて行きました。おじいさんの腕の中の仔猫もまた、時計の下に落とされました。

落ちながら仔猫は、床の上でのびている自分の体を見つけました。吸いこまれるように体の中に入りこんだ仔猫は、起き上がった手足を伸ばし、つめの先まで自分の中にとけこんでいることを確かめました。

仔猫は体をしゃんと立て、夕日に染められた部屋の中を見ました。

おばあさんは、こくりこくりと居眠りしています。

……くぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ……

おじいさんは、あいかわらず深い息で眠りこんだままです。が、いきなりその息が止まりました。

おばあさんが、はっと目をさました。

おじいさんは、息を止めたまま、みけんにしわを寄せました。まるで体中の力をひとつところに集めているようです。

みけんのしわがひとときわ深くなりました。こめられた力は、迷ったり飛び散ったりしないように、とても注意深く、少しずつ口元にまでおろされて行きます。

ピーンとはりつめた部屋の空気が、かすかにひびわれたような気がしました。

「おじいさん！」

部屋がゆれたのかと思って、とっさにおばあさんは、おじいさんをかばっておおいがぶさりました。が、部屋がゆれたのではありませんでした。

おじいさんの口がヒクヒクと震え、やがて、頬を寄せているおばあさんの耳元で、かすかな声が発せられました。

「あんだでよかった。一番好きだった」

声を発した口元から、最後の息が吐き出されました。

おじいさんのたましいは、これで安心して舟に乗っていけると仔猫にはわかりました。あの窓を通過して行ったかな、と時計を見上げました。

けれども窓は閉じ、音も立てず、時計は止まってしまっていました。

五平じいさんとスイーミン

小沢とじ

このお話は、みなさんのお父さんやお母さんが、まだ子どもだったころのお話です。

五平じいさんは、信州ながのけん(の山おくの、そのまたすつと山おくの小さな村に、おばあさんとぶたりでくららっていました。

五平じいさんのすんでいる山おくの村では、春になると、色とりどりのうつくしい花がさき、小鳥たちが楽しそうにうたいはじめる、のうかでは、みんながいつせいに外にでて、畑をたがやし、たねをまきます。

夏になると、山の木のみどり美しく目にしみるようになり、セミが一日じゅう、ミンミンとなきつづけ、大きなスイカがはちきれそうにみをぶくらませます。

秋になると、夏のあいだみどりいっぱいだった木の葉が、赤や黄色にかわり、村の人たちはみんなで秋のとりいれでいそがしくなるのです。しゅつかくが、ぶじにおわるとみんながいちばん楽しみにしている村まつりがはじまり、みんな夜はおしおどりあかします。そして、この村まつりが終わるとめつきりとむくくなり、やがて長い長い冬になるのです。

くまらっていました。

さて、こんなのんびりとした村に、あるとしたいへんにしんばいなことがおこってしまいました。

そのとしも、秋のとりいれがちがついて、さくもつがどんどん大きくなっていくようすを見て、村の人たちの顔は、もううれしさではちきれそうでした。

そうしたある夜、どこからか急にたくさんのイノシシが村にあらわれて、せつかくみのりかけたさくもつを、ところかまわず食いあらしてしまいました。しかも、イノシシは、それからも毎日のように村にやってくるようになってしまいました。

村の人たちは、こまりはてしていました。

せつかく大きくなったさくもつを、イノシシに食べられてしまったのでは、さむくてながい冬のあいだはもちろん、らいねんのとりにいれまでの食べものがなくなってしまいます。

村の人たちは毎飯のようにあつまってイノシシたいじについてそうだんしましたが、なかなかよいかんがえがうかんできませんでした。

終わらない夏休み

畠山 真佐子

今日は、夏休みさいこの日。なのに、ぼくの前には宿題の山。「ママは知りませんよ。手伝いせんからな」「いいよ、別に。一人でできるから」ぼくはママを部屋の外に押し出して、ペロッと舌を出した。いや、もう。テキストに片付けちゃえ。ぼくは画用紙に、クレヨンで魚の絵をなぐり書きして、「水を大切に」と書きそえた。これで、ポスターいっちょ上がり。自由研究は、去年のやつをそのまま出しちゃえばいいや。夏休み帳は、答えを丸写しだ。おっと、全問正解だとはれちゃっつから、ところどころまちがいを入れなくちゃ。さあ、終わった。ああ、つかれた。ぼくはベッドにもぐりこんで目を閉じた。明日から学校が。夏休みがもつとつづけばいいのになあ。

パパもママも、きょとんとした顔でぼくを見る。「何言ってるの。学校は明日からでしょう」「え？ 今日、八月二十日でしょう？」「いや、十九日だよ。ほら、見てごらん」パパが読みかけの新聞を差し出した。たしかに、八月十九日つけて書いてある。「おっかしいなあ」ぼくは首をひねりながら、自分の部屋にもどった。昨日やったはずの宿題も、真っ白。あれは夢だったのかな。ぼくはため息をついて、またポスターをなぐり書きしはじめた。ところが次の日も、ぼくが起きると、パパとママが言う。「学校は明日からよ」「今日は十九日だぞ」次の日も、その次の日も、そのまた次の日も……。夏休みさいこの日から、時間が前に進まなくなってしまった。そりゃあ、夏休みがもつとつづけばいい、とは思ったよ。でも、こんなのはイヤだ。宿題の山。同じ会話をするパパとママ。昼はそうめん、夜はカレー。宿題が終わってないから、どこにも行かせてもらえないし、ゲームもさせてもらえない。ある日、ぼくは悲しくなって、いつもは「水を大切に」と書くポスターに、「時間を大切に」と書いて、大きなうずまきの中にのみこまれていく時計の絵を、絵の具でいいいに描いた。そのうずまきが、終わらない夏休みに見えてきて、ぼくは大声をあげて泣いた。

次の日も、やっぱり十九日。でも、いつもとちがうところがあつた。「時間を大切に」のポスターが、残っていたんだ。どういうことだ？ ぼくはじっとポスターを見つめた。いつもは、朝起きると、真っ白な画用紙にもどっているのに。そのとき、何かがひらめいた。これは、ひょっとして……。その日、ぼくは日時計を作って、一時間おきに影の長さをはかり、観察の結果をもぞう紙にまとめた。時間がこんなにめちゃくちゃに流れているのに、太陽はきちんと定期的に空をまわっていることがわかって、不思議な気分だった。観察のあいまには、夏休み帳を自分の力で解いた。夜おそくまでかかったけれど、答え合わせもして、まちがえた問題はやりなおした。宿題を全部ランドセルに入れて、ぼくはいのつた。どうか、明日は、夏休みが終わっていますように……。次の朝、パパは言った。「おはよう。今日から二期期だな」ぼくはパパの手から新聞をうばいとつた。日付は……、八月二十日！「やったああ、夏休み、終わったんだ！」パンザイしているぼくに、パパはおかしそつに言う。「お前がそんなに学校が好きだったとは、ちっとも知らなかった」ゆ「ひびきしぶりにお友だちに会いたいのよ。そつよねっ」

「そつじゃなんだよなあ、ママ」「いすに座り、フォークをにぎってぼくは首を横にふる。」「夏休みが終わるって、最高だね。ぼく、もう、夏休みなんてこりごりだよ」

モモちゃんのお山

畠山 真佐子

「もうちょっと、もうちょっと」
モモちゃんは、右手をのびしました。左手ですくすく砂をかきます。
「やった、とどいた」
右手と左手が、ゆびさきであくしゅ。それから、そおと、そおと、うでをぬきます。
砂がパラパラと落ちてきます。心臓が、ドクン、ドクン、音をたてます。くずれてしまったら、またやりなおします。でも、だいじょうぶ。トンネルは、なんとかもちこたえてくれました。モモちゃんは、山のてっぺんに、赤いバケツをおきました。
「わあい、できた」
モモちゃんが一人で作った、砂のお山。ちゃんとトンネルもあります。赤いバケツは、モモちゃんのおうちなのです。
「お山のてっぺんのおうちには、ウサギさんやシカさんがあそびに来るの……」
ドーン――

「あのワルガキども、本当にしょうがない」
松の木が、枝をガサガサゆらしました。
「ぼくたちで、モモちゃんのためにお山をつくったらどうかな」
キリンの乗り物が、思いついたように言いました。
「そういうことなら、わたしも協力しよう」
プランコが、柱を地面から引きぬきました。
「さあ、公園じゅうが動きはじめました。すべり台がブルドーザーのように砂をあつめてきます。ソウは、ふん水から水をくんできて、シャワーのように砂にかけます。プランコの板がそれをべたべたとかためて、キリンが長い首でトンネルを通し、松の木はほそい枝でもようをつけて……」
月の光のなか、公園ではふしぎな影が、夜どおし動き回っていました。

つぎの日、モモちゃんが公園に行くと、いつもサッカーをしている男の子たちが、砂場に集まっています。
「すげえ……」
男の子たちは、口をポカンと開けています。
モモちゃんが、男の子たちをかきわけて前にでると……。
見えたのは、大きな大きな砂の山。モモちゃんの背よりも、ずっと大きいのです。ふもとには、太いトンネルがぼっかりと口をあけていて、線路のまよつがかがかかれています。しゃ面には松ぼっくりがおかれていて、まるで森のまよつです。小さなウサギやシカまで、砂で作ってあります。森の中をほそい道がくねくねとび

モモちゃんは、しりもちをつきました。急に飛んできたサッカーボールが、砂の山にめりこんでいます。
「おい。ボール取ってくれよ」

男の子たちが走ってきました。モモちゃんは、うごけません。赤いバケツはぶっとびました。トンネルも、すっかりくずれてしまっています。
「取ってくれって言ったじゃないか」
男の子たちは、モモちゃんをにらみつけました。それから砂場の上でボールの取り合いをして、山をすっかりつぶみつけてから走っていきました。
「あたしのお山……」

モモちゃんは今うちど山を作ろうとしました。でも、うまくいきません。手がふるえます。目になみだがたまってきました。何回やっても、トンネルがくずれてしまつのです。
「モモちゃん、こはんですよ」
お母さんがよびにきました。
「おねがい、もうちょっとだけ」
モモちゃんがたのんでも、お母さんは「もう、暗くなりますよ」と首をよこにぶって、モモちゃんの手をひっぱって帰りました。砂場の山も、くずれたまま。赤いバケツも、おきっぱなしのまま。
月のぼりました。公園には、もう誰もいません。
「モモちゃん、かわいそうだったな」
ソウの乗り物が、のびをしながら言いました。

「あ、あたしのおうち」
モモちゃんが指さしました。
山のてっぺんには、赤いバケツがちょこんとおかかれています。

クローバー野原で

あそんだよ

山崎 玲子

子つなぎのミミは、クローバー野原で、やわらかくておいらにクローバーの葉っぱをたべていました。おとうさんとつなぎとおかあさんつなぎもいっしょです。

「ミミたちとおなじ色のクローバーの花がいちめんに咲いています。甘いかがりがホワンとあたりをつつんでいました。」

「おるすばんしている、おにちゃんにもとっていきまじょうねおかあさんがいいました。」

「ミミは、あたたかい光でいっしょの空を見上げました。山の上をゆったりと雲がながれていきます。」

「ミミが野原を見わたすと、茶色いものが「ソソソ」と動きまわった。」

「あそこにはだれがいる。」

「ミミがさけびました。」

おとうさんとおかあさんは「ミミをかばおうとうとうりかんと、クローバーの花のかけにじっとしていました。」

「キツネなの？」

「うう、うすか？」

「あう、あなたの名前は何？」

「私、ミミ。」

「ミミはなんだかうれしくなっていて、一回はねを、ミミのあとをおいかけてました。」

「ミミは大きく右へへ、大きく左へへかいたジャンプして、もとのところへもどります。」

「ミミはね。」

「ミミもやってみました。いかなんかおもしろい感じがして、ミミみたいた、はねる感じができました。」

「ミミはね。」

「ミミはうれしくなりました。なんでも、ミミのするのうしろをしてみたくなりました。」

「ミミはクローバー野原を、ぐるぐるまわりました。そのあとをおいかけるおとう、おともも血がまわるほど走りまわりました。むねが下下下キキして、空井井の音でうたうたがはじまりました。」

「ミミはとつぜん、野原のまわりにある、いろいろな木のかげにかくれました。」

「いなくなっちゃったの？」ミミは、いろいろな木のうしろをさがしました。するとすばいミミは、反対がわにかくれています。」

「ミミはね。」

「ミミはななまをうたうた、茶色い耳をぐるぐる動かして、ミミが顔を隠してました。」

「ミミはね。」

「ミミがホッとして、ミミをおかかけのミミ、ミミはいろいろなところへ

おかあさんが小声でいいました。

長い冬のあいだ、つなぎあなのなかで、おとうさんは、キツネやおオカミがどんなにこわいか、いつも話してくれました。

「ミミはキツネもおオカミも見たことはありません。」

茶色いものがズン、ズンとちかづいてきます。

おとうさんがきゆうに、立ちあがりました。

「なあんた、山つなぎの子だよ。」

「山つなぎ。」

「そういえば、毛の色はちがいますが、すがたはミミたちとまったくひです。」

「きつと山からクローバーをたべにきてきたのね。」

おとうさんたちは、安心してまたクローバーをたべにいいてしまいました。

白いクローバーの花のなかに、茶色い山つなぎの子が、ちかちかとすわっています。黒い目をクリッとつつかしました。茶色い耳が「ツツ」とゆれました。

「ねえ、いっしょにあそばない？」

「おとうさん、ミミをみつけたよ。」

「あそぶ。」

「ミミには、あそぶってなんだかわかりません。家族のほかには、じぶんとおなじつなぎにあってのはじめてでした。なにしろ、ミミにはじめての春だったので。」

「うう、うすか？」

山つなぎはかけたし、ふりかえっていいました。

この木のほり、枝をゆすりました。すると、うすいピンク色の花がはらばらとまじりました。

「ミミは、いろいろな木のうしろでミミを見上げます。こんなことをするなんて、ミミはすうううなまはです。」

そのとき、おとうさんとおかあさんが「ミミをみびました。」

「ミミはね。」

「ミミはね。」

「ミミがミミにいいました。」

「ねえ、あしたもあそぶ。」

「あしたも。」

「そう、あしたも。おひさまがのぼったら、クローバー野原でまわって遊ぶから。」

「ミミは、山のほうへ走っていききました。」

「ミミはミミのすがたが見えなくなっても、さびしくありません。だって、あしたもミミに会えるのですから。」ミミはうきうきして、またひとつはなめました。

「おとうさん、おかあさん、私、あそんだの。あそんだんだよ。」

おとうさんつなぎと、おかあさんつなぎは顔をみあわせて、ううううしました。

「おとうさん、おとうさん、あそぶ。」

「おとうさん、あそぶ。」

「ミミは、あそぶ。」

「ミミは、あそぶ。」

「おとうさん、あそぶ。」

おにいちゃんはんはちよつど、タンポポの葉で、うなぎサワタを作っていました。

「なんだよ。うれしそうだなあ」

「あ、ね、私、と、ともだちと、あ、あそんだの」

「くえー、だれと？」

「三つ子のピョンちゃん」

「くえー」

「……の耳がピッとたちました。

「これがともだちとあそぶって、三つ子となんだと、……はははじめてわかったのです。

そのとき、……のきらいなみみすが一匹、クニヨリクニヨリと

……のまえをキリきりました。……はぶるるとしました。

「あつちくいつてー」

おにいちゃんはんは、みみずをあなの外へほおりだしてくれました。

「おれは、ひとりごと。だって、じぶんのすきなむすこをきななでもでるじやないか」

……の目がまんまるになりました。ともだちとあそぶって、……んなに楽しいの……。

おかさんが、とってきたクローバーをおにいちゃんにわたしました。

「……」

おにいちゃんはんは、クローバーの葉をつみみずサワタにぐわえまじ

つきの日、朝はやく目がさめた……は、おひさまがのぼったのをたしかめると、クローバー野原へ走っていきました。

「ピョンちゃんはきているかなあ」と……はちよつとしんばいでした。

「ピョンちゃん？」

「……はみんでみました。

「お、お、お」

「……は……の……を……三つ子……と……走りました。

「お、お、お」

……は……のあとを……い……と……はねていきました。空までもほっていきそうです。

「……が立ちどまって、クローバーの葉っぱをたぐるよ、……もたへました。

「……が、クローバーの花にとまったと……虫をじっとみるよ、……まじって……虫をみつめました。

……はむちむちななって、……がする……をまなました。

つきの朝も、……はおひさまがのぼると、クローバー野原へかけました。

「……は……ちよもはやくきていて、前足をぐいぐい動かして、あなほりをしていました。

「……ちゃんも、あなほりして」

「……」

「……の……お……三つ子……は……がしく前足をぐいぐい動かして、あなほりました。

「……は……お……」

「……は、……も……を……」

「……は……」

「……」

「……はその日、……と……に……あなを……」

おひさまは、西の山にはんぶん入りかけています。

「また、あしたね」

「……は山のほうへかえっていきます。

「あしたね」

「……も、走ってかえっていきます。

また、あした……なんてすてきなことはだるうと思ながら、……

……はゆうやけにそまった山を見上げました。

つきの日はぶたりでほった七つのおなつぎつぎに入っただけで、あそびました。

「……は……」

「……が五つめのあなからきてきていました。……があなへ入るうとするると、くらくらいなあの中は……くもがありました。

「……」

「……は……う……」

「……は……」

「……があなをのぞきます。

「なんだ、みみずじやないの。……」

「……がため……」

「……は……」

「……は……」

「……は……」

かみなり

たけむら すみい

ト下ッ ト下ン ト下ン ト下ン

でっかい、かみなりだ。

おばあちゃんは、お仏さんの前にすわって、お線香をあげている。かみなりがなりだすと、いつもそつだ。両手をあわせながら、「安全でありますよう、どうぞお守りください」と言つて、お祈りする。

おばあちゃんが子供だったころ、その古い家には、いろいろがあったのだという。いろいろにお線香をたてて、かみなりさまがおちませんようにと、お願いをしたのだそつだ。

ぼくは、いろいろを昔ばなしの絵本で見るのとしかない。家のなかで、火をもちやすなんて、とても楽しそう。まわりに兄弟があつまつている。すくいいいなあ、と思う。ぼく、弟がほしいんだ。

ト下ッ ハリハリーン

「よかつたあ。死んじゃわなくて、よかつた。ねえ、桃色の玉つて、すくく光つてた？ 大きかつた？」

「いっしゅんのことと、何とも言えないけど、ぜんぜん光つちやになかつたよ。あの桃色はね、そつさ、何ていったらいいのかや」

おばあちゃんは目をつむつた。そして、

「おかあさんが出かける時、ほら、桃色の口入をたまにつける、あんなおとなしい色だつたな。大きさは、タケちゃんの顔ぐらひはあつただらさず」

「うううう」

バツチャ バチャ バチャ バチャ

大つぶの雨が、すくいいきおいでふり出してきた。

「もうだいたいじょうぶ。雨がふり出すと、かみなりさまとおくへんにつてくれる。タケちゃん、おへそ、しっかりしまつとくたぞ」

「うううう」
「タ立ちのあとほ、空気が急な、ひんやりとするから、おなかをひやしちやなりませんと、注意の言葉、それが、『カミナリサマニオントラレルナ』っていうことなんだよ。」

ぼくは、ちよっぴり、ねむくなつてきた。たまには、おばあちゃんにだつてこつてもううのき、いいものだ。

ぼくの心ぞつまで、とびあがりそつな、すくいいのがなつた。思はず、おばあちゃんにだきついてしまった。おばあちゃんの腕が、ぼくをギュイと、うけとめてくれた。

「こりや、どこかにおちたな。いいかい、タケオヤ。かみなりがなりしたら、大きな木の下にいては、いけないよ。それから、ガードレールのそばも、せつたいだめ」

「えっ？ ガードレール？」
「そつだよ。昔、おばあちゃんね、かみなりを見たことがあるんだ」

「うううう」

「ほんとのほんとだよ。おじいちゃんと結婚したばかりの頃でね、あの日も、えらくでっかいのがなつたんだ。おじいちゃんときたら、畑へ行つたきり、帰つてこないもんで、心配になつてむかえに出てき、ガードレールの前に立つたその時だつたよ。目の前に、桃色の玉が、しゅんかん、見えた。と同時に、『ハリーン』と、耳のおくまでつきささるようすくいい音がした。かみなりが、ガードレールにおちたんだよ」

「おばあちゃんの体、ヒリヒリなつちやつたの？」

「それがさ、まるつきり、何ともなかつたんだよ。ところが、夕方になつて、となりの家のアケミさんがさわぎ出した。ガードレールから十メートル位、はなれてた、アケミさんちのフロパンガスのメーター機が、こわれちやつてたんだ。もし、あれが、おばあちゃんの体のほうに伝わつてたとしたら、あの時、おばあちゃん、死んじやつてた」

雨声

なかざわ りえ

雨の日

林で

ひろった石

しずかな顔を

絵の具で描いた

手にのせて

みつめていると

いつのまにか

わたしが

みつめられている

なにか話したそうに

よぶけ 雨がふっている

かすかな 雨声

石からも

きこえてくる

アンスの花

なかざわ りえ

去年 おじいちゃんと植えた

小さなアンスの木に

うすももいろの花がさいた

アンスの花の香りが風にただよう畑で

わたしは声をかけていた

「みてみて 花が咲いたよ」

十二月にたおれて

そのまま死んでしまったおじいちゃん

おじいちゃんはだれよりもしんばいしてくれた

いじめにあって学校にいけなくなったわたしを

肩に手をおいていってくれた

「げんきだしな」って

言葉はそれだけだった

わたしは冬じゅう 自分の部屋から出なかった

窓ガラスにおでこをくっつけ アンス畑を見ていた

おじいちゃんを思い出しては涙ぐみ

学校にもいかない だれにも会いたくなくなった

風をつめたい日はまだあるけれど

今朝のアンス畑は

あつたかくて しずか

とつぜん うしろで鷺の声でした

「ケケ ケッキョ ケッキョ ケケケ」

「うぶぶぶ」

わたしはわらった

そして はっとした

（へただっていいわ どうしていけないの）

あっ アンスの花が

咲いている

新学期は もう始まってしまったけれど

クラス替えもおわったけれど

新しい教室へ

そっと はいっていった

ふしぎなくしゃみ

よだ ひでし

冬も近づいたある日のことでした。
森の中では、アリたちがエサを運んでいました。
一匹のアリが、くしゃみをしました。小さな小さなくしゃみで、だれにも聞こえませんでした。
「かぜを引いたかな？」
けれど、休もうなんて考えません。みんなもがんばって運んでいます。
もう一匹のアリがくしゃみをしました。
「だれかのかぜがつついたかな？」
このアリも働くことが大好きです。だまってエサを運び続けました。
そのうち、三匹、四匹、五匹、六匹……アリたちはみんなかぜを引いてしまいました。
小さなくしゃみがたくさん集まったら、聞こえるくしゃみになりました。
「クスッ！」

たくさんのおネズミが、クルミの実を取り合ってけんかを始めました。
クルミの実は、コロコロと川の中へ落ちてしまいました。
「あっ！」
みんなが大声でさげびました。けれど、ネズミたちは水に入れません。
つまらなそうに、別のえさをさがしはじめました。
「クチュン、クチュン」と言いながら。
キツネは家の窓から外を見ていました。
「たいくつだなあ、何かおもしろいことはないかなあ」
すると聞こえてきたのが、「クチュン、クチュン」というくしゃみでした。
「ねずみたちが集団でかぜを引いたのか？ これはニュースになりそうです」
キツネは、くしゃみの聞こえる方へ飛び出していきました。ネズミたちから話を聞いて、「まぬけなやつらだ」と思いました。
「このことを友だちに知らせよう」
キツネははりきって、別のキツネの家へ向かいました。
「クシユコンー」「ちは
「おやおや、かぜですか？」
「よくわかりましたね?! 森のネズミたちが、かぜを引いたみた
いなんですよ」
キツネは、ネズミたちから聞いてきたことを、たくさんしゃべ

くしゃみを、一匹のネズミが聞きました。
ネズミは、クルミの実を運んでいるところでした。
足元を見ると、アリたちが歩いていました。
「はあ、こいつらがかぜをひいているのか。」おーい、無理はするなよ」と声をかけました。

ネズミはアリの行列をじつと見ていました。そのうちネズミも、「クチュンー！」
くしゃみをしてしまいました。
アリたちのかげがつついたようです。けれど、ネズミだって仕事をしなければなりません。
「へいきへいき」
クルミの実をかかえて、ヨタヨタと歩き出しました。しばらくすると、ふらふらしてきて、クルミの実を落としてしまいました。
「おいしいもの、みっけ」
木かげからもう一匹のネズミが出てきて、クルミの実をつかまえました。
「おいおい(クチュン)、「これはぼくのものだから返してくれよ」
「いやだ。落ちていたものをひろったから、これはぼくのものさ」
二匹のネズミは言い合いを始めました。やがて、けんかになりました。
二匹の間から、クルミの実がころがりまわりました。
「お、いいものがあつた」
別のネズミがひろいました。今度は三匹のけんかになりました。またまたクルミの実は、ころがっていきました。

りました。
「それはゆかいだ。せひ、ほかの友だちにも知らせましょう。クシユコン」
二頭はそろって、別の友だちの家へ行きました。
友だちの家から友だちの家へ、キツネたちは歩いてゆきました。「クシユコン、クシユコン」と言いながら。
新しいかぜ薬を發明するために、タヌキは研究をしていました。たった今、完成したので、一ヶ月ぶりに窓を開けました。
すると、森のあちこちから、アリアネズミやキツネのくしゃみが聞こえてきました。
「よし、さっそくこの薬をためてみよう」
タヌキは薬のびんを持って、外へ飛び出して行きました。
「おーいみんな、これを飲んでごらん」
アリアネズミもキツネも、タヌキがくれた薬を飲みました。そしたら、くしゃみが止まりました。
「やった、大成功だ！」
みんなは「ありがとう」と帰って行きました。
けれど、次の日。
またまた森の中から「クスッ!」、「クチュン!」、「クシユコン!」とくしゃみが聞こえてきました。
「きき目が弱かったな。もっと強い薬を發明しなきゃ。よし、友だちの力も借りよう」
タヌキは友だちを呼んで、またまた研究室にこもりました。

何日かすると、中なら「クボン！」といつくしゃみが聞こえてきました。

それでもタヌキたちは、一生けんめいに研究を続けました。

「クボン、クボン」

くしゃみは、えんとつをぬけて、森の中に広がっていきました。

「フワックション！」

ついに、クマがくしゃみをしました。

「なんだなんだ？ 鼻がむずむずしてしょうがないぞ」

「さっき、ミツバチに鼻を刺されたせいかな？」

「いや、フワックション、これはかせだ。フワックション、フワックション」

クマがくしゃみをするたびに、森全体がゆさゆさとゆれました。

「くそっ、何でオレがかぜをひかなきゃならないんだ。オレは森で一番強いんだぞ」

クマはぶつぶつ言いながら、ついでに大きなくしゃみをあちこちにばらまいて、森を歩き回りました。

「クスッ！」

「クチュン！」

「クシュコン！」

「クボン！」

そして、

「フワックション！」

森の中はくしゃみだらけ。森のくしゃみは止まりません。

そしたら、

「ワシも、くしゃみをしていいかなあ」

「ワシの上でみんながくしゃみをするもんだから、くすぐったくてしょうがない」

言ったのは、地球でした。

「ちよう特大のくしゃみをしたら、気持ちいいだろうな」

「でも、みんな、ふっ飛んじゃつかもよ」

ハ、ハ、ハ……、ハックション！

ボクだけが見えた 「アイツ」

守屋 一利

1

インフルエンザで、四十度の高熱が五日間続き、その間、ずっとこわいまぼろしを見ていた。うす目を開けると、天井がおそろしい速さで遠ざかっていく。同時にハリの雨が降ってくる。こわくなって、あわててぶとんをかぶる。

「だいじょぶぶっ」

母さんが、声をかけてくれた。

よかった。ほっとして目を開けると、母さんがとつぜん、キツネ顔になって、ぐるぐる回りながら天井に吸いこまれていった。

「ギェー」

「こわくて、こわくて、ボクは、目を開けられない。ずっとぶとんをかぶっていた。」

やっとインフルエンザが治って登校した学校は、なつかしい感じがした。ボクは、席に着くと、ゆっくり教室の中を見回した。

すると、ボクが学校を休む前には、いなかった男子が、廊下側の前から六番目に席にすわっている。転校生か？ 身長はぼくと同じくらい。面長のスポーツ刈りで、運動神経がよさそう。まだ、クラスに慣れていないのか、だれとも話さないし、だれも話しかけない。座ったきりだ。

体が、透けて見えるような気がするけど……。きっと気のせいだ。気にしないようにしようとボクは、授業に集中した。

ボクの席は、窓側の前から二番目だから、その転校生を見るには、首を百六十度くらいひねらなくてはいけない。不思議なことに、授業中ぼくが、転校生を見るたびに、目が合った。そんなことが、何回も続くと、だんだん後ろを向けなくなってくる。そういえば、アイツは、トイレにも立たないような気がするけど、そんなばかな。

それで、となりの席の勇介に聞いた。授業中だったので、小声で、

「勇介、あの転校生は、なんて名前だ」

と言うと、

「うん？」

「廊下側の一番後ろの席に座っているヤツ」

「一番後ろっ……」

「ほら、「と振り返って、転校生を見つめていたら、

「私語をやめなと」

と先生からおこられた。

休み時間に、勇介から話しかけてきた。

「ケンタロウ、何言っているんだよ。転校生がどこにいるんだよ」「すわっているじゃないか。ほら、あそこ」

指を指すのがこわかったから、視線を送った。

「だから、どっ」

背筋がゾクゾクつとふるえた。

「転校生なんて最近入って来てないよ」

アイツは、ボクにしか見えてないのか、まさか。

五時間目の国語のときだった。先生が、こう言った。

「川村さんから後ろに向かって、順番に音読してください」

川村さん、尾島君、春川さん、君本君、田山さんの順に読むと、

六番目は、アイツなのだ。これではつきりと決着がつく。

田山さんが、音読しているときに、胸がドキドキと高鳴り、破裂しそうだった。

そして、田山さんが読み終わり、つぎに立ったのは、アイツじゃなかった。アイツは、何事もないように座っていた。だれにも見えていないのだ。見えているのは、ボクだけだ。

アイツは、いたずらをするわけではなかったが、うす気味悪い毎日が続いた。学校を休みたかったが、「幽霊が見えるから、学校に行きたくない」とは、言えなかった。

2

三時間目の休み時間、ぼくは、理科室に向かっていた。

「ちよっといい」

「何のことなのかわからないよ。最近、一組に死んだ子なんていないよ」

「最近じゃなくて、ずっと昔に」

四時間目のチャイムが鳴った。

「つまり、こういうこと。DVDに人の姿や声を記憶できるように、死んだ人の強烈な思いが、大きな家や大きな岩、大木にやどることはよくあることだよ。ただ、その思いをDVDプレイヤーのように、再生できる能力を持った人間は、ごく少ない。つまり、君は、百万人に一人の能力を身に付けた人なんだ。」

いやだ、いやだと大声を出して、走り回りたかった。そんな能力はいらない。三十五人いる六年一組の中で、半分以下の成績のぼくが、なぜ、百万人の中の一人なんだ。

「おい、ケンタロウ、いそがないと、先生が来るぞ、行こう」

ぼくは、勇太に引っぱられるようにして、理科室に行った。

3

日本全国の多くの小学生が事故や病気などで、命をなくしていることは、想像できる。その子ともたちが、一人一人が、その子なりに、強い思いを持っていたこともわかる。しかし、その思いが、物に刻みこまれることがあるなんて、信じられない。

でも、相変わらず、アイツは、教室に居すわっていた。ただ、アイツが、最初に、ボクが見たときよりも、透明度が増しているような気がしていた。もつしぱらくすれば、消えるかもしれない

後ろから聞こえた声に振り向いた。立っていたのは、見たことあるような、ないような。

「だれだっけ」

「四組の山田だよ」

そういうと、ボクとすれ違った三人グループの男子に「よう」という感じで右手を挙げて合図した。

「あっ、何？」

「君、見えるんだね、アイツが」

ドキンと心臓が止まりそうだった。

「お前も見えるのか、幽霊が見えるのか」

ボクは、声をひそめていうと、山田君を廊下のすみに連れて行った。

「なぜ、ボクにだけ幽霊が見えるんだ」

「ちよっと、待って。幽霊って何。言っておくけど、あれは幽霊じゃない」

「幽霊じゃないって。ぼくにだけ、一番後ろにすわっているアイツが、見えるんだよ」

泣き出しそうな気持ちを、ギリギリおさえて、低い声で話した。

「君が見ているのは、幽霊じゃなくて……。なんて言うのかな。」

この小学校にずっとすみついていて『思い』なんだよ」

「思い？」

「うん、強烈な気持ち。たぶん、病気が事故か、わからないけど、六年生で命を落とした男子の思い。その思いを特殊な能力を持った君が、読み取った」

と、期待した。

でも、山田君からは、アイツが何をしたいのか、確かめてほしいと催促されていた。うす気味悪くてすくには、実行できなかった。

数日後、とうとうボクは、体育でだれもない六年一組教室に入ってしまった。アイツは、教室の窓側に立ち、運動場を見ていた。

「何見ているの」

ボクは、あまり近づきたくなかったので、黒板の前から声をかけた。

「いいなあ。ぼくももう一度、みんなと運動場を走り回りたかった」

「君は、病気だったの」

「うん、でも、もう治ったよ」

「明日、四組とサッカーをして遊ぶから、いっしょにやろうか」

「いいの」

「いいぞ。ずっと教室にいるは、たいくつだろ」

「でも、病院よりはいいよ、ここは。勉強もしたかった」

「じゃ、あした」

「ウン」

ボクは、アイツの笑顔を初めて見た。

4

一組対四組のサッカーは、昼休みに行われた。正式の試合じゃ

ないから、人数も適当だった。勇介のキックで始まった。ボクはアイツだけを見ていた。アイツは、ぼくがボールをキープするとすばやく前を走り、左手をあげてボールをほしがった。だから、マークを外すとアイツに向かってけた。ボールは、ねらい通りに飛んでいったが、飛びだしてきた勇介がカット。そのまま、ドリブルで切りこんで、シュートしたが、ボールは、大きくゴールを外れた。なかなか、ゴールをうばえなかった。

「ハンドー！」

だれかの声が出た。ボクは、転がったボールをわきにかかえろと、ボールをセットした。ゴール前に、勇介たちが集まった。

アイツは、ゴールから少し離れたところで身構えた。ボクは、右手を挙げて、「いくぞ」という合図をした。勇介がすぐ応えたが、ボクは、アイツに合図したのだ。

思いっきり、ボールをけた。ボールは、ゴールのわくを外れて飛んでいった。

そのとき、アイツがゴール前に走りこんで、ジャンプした。ボールは、アイツの頭にヒットし、ボールの方向が変わって、ゴールネットをゆらした。

「すげえー、カーブ」

興奮した勇介が、走ってきて、飛びついてきた。ぼくは、バランスをくずして、運動場に倒れこみながら、アイツを見た。アイツは、フリーガーみたいな、指を一本立てて運動場を走っている。その後ろから、山田君が追いかけていた。

「山田君もいたのか」

二人は、そのままつれるように運動場に転がった。チャイムが鳴り、みんな教室に向かった。

昇降口に向かいながら、アイツをさがしたが、見つからない。どこにいるのだからときよるきよるしている、勇介が近づいて、「ケンタロウ、お前このころ、どうかしたんじゃないのか。すこいカーブをかけてゴールさせるし、廊下では、空気に向かってしゃべっているし」

「空気に向かって？」

ぼくは、反射的に六年四組の教室にかけた。

「ね、四組に山田君で、いるよね」

四組の教室に入ろうとした、女子にぎいた。

「山田君、いないよ、そんな子」

女の子が、首をかき上げて言った。

血の気がスーッと引いていくのを感じた。自分の教室にいそいだ。廊下側の六番目の席に、アイツはいなかった。

それ以来、ボクは、学校でアイツを見たことはない。

詩五編

西川 豊子

おみやげ

月曜日

遊園地のおみやげもらったの

日曜日に

家族みんなで行ったんだって

わたしは遊園地行ったとき

おみやげ買ってこなかった

だってその日

カゼひいたって休んだもん

わたしもだれかに

おみやげ買えたらいいのにな

お母さんのお休みが

学校といっしょだったらいいいのにな

宝くじ

新しいゲーム機であそぼうか

レストランでおいしいディナー

家族そろって海外旅行

それとも広いおうちがいい？

そう言っつかあさんは

宝くじ売り場で並ぶんだ

でも宝くじがはずれたら

「いい夢を買った」って笑うんだ

かあさん

ぼくは夢よりも

今

あのソフトクリームが食べたいな

金曜日の夜

金曜日の夜
宿題やって
ごはんを食べて
お風呂に入って
お兄ちゃんと遊んで
テレビを見て
それでもまだ
起きている

金曜日の夜
おそくまで
起きていても
おこられない
月曜日から木曜日までは
早く寝ないと
おこられるのに

金曜日の夜
チャイムがなる
「ただいま」

パパのつかれた声
「おかえり」
ぼくは玄関にいそぐ
もうすぐ十二時
金曜日から
土曜日に変わる

打ち上げ花火

キミが「好き」っていった
アタシの心の中
打ち上げ花火が上がって
ただのクラスメートのキミが
一瞬でカレシになった

微笑んだアタシ
苦笑いのキミ
教室のすみ
アタシとキミを指差し
ニヤニヤ笑うあの子たち

わかった
キミはあの子たちから
罰ゲーム受けたんだ
誰も好きにならない女子に
ウソのコクハクするように

アタシの心の中
打ち上げ花火が
一瞬で消えた

おそろい

パパのおばあちゃんちで
お泊りするとき
レモン色の毛布

ママのおじいちゃんちで
お泊りするとき
レモン色の毛布

わたしの部屋で
一人で寝るとき
レモン色の毛布

しわの間の細い目が
いつもわらっていた
ひいはあちゃん

親せきのうちに
お香典返し
レモン色の毛布

クッキーたべたら

宮下澄子

森のいりぐちに、小さなケーキやさんがありました。作っているのは、ひげつらの若いおにさん。近所に住む人はもちろんのこと、森に住む動物たちもおいしいケーキを買いにやってきました。売られているのは、木いちこのショートケーキ、くりのモンブラン、シュークリーム、それにクッキー。この四つでした。(もう一つ、ちがうケーキを作りたいな)と、このしろお兄さんは考えていました。

「にんにきは」
すきとおった良くひびく声で、朝いちばんのお客さんが入ってきました。
「いらっしやませ」

ショートケーキに木いちこのせていたおにさんが振り向き、お客さんは、くまのお母さんとふたごの子ぐまでした。「なにをさしあげまじょう?」
ふたごの子ぐまはなかならんで、ショーケースの中をじっ

とみつめています。

くまのお母さんはちょっと元気がありません。毛なみにもつやがないので、

「くまのお母さんどうしました?おやせになりましたよ」

と、おにさんがきくと、くまのお母さんは頭にのせていた赤いぼうしをちよこんととりながら言いました。

「なにしろこの陽気でしょう。いつもなら穴の中に入ってたつみんする時期なのに、寒くならないものだからこの子たちもねむれなくてこまるんです」

「それはそれは。たしかにあなたがかいですわね」

くまのお母さんは、ため息ついて言いました。

「もう私もこの子たちを寝かしつけるのにつかれています。うとうとしたかとおもうと、すぐ起きて遊んでしまっんです」

そう言うくまのお母さんの目の下には、大きなクマができていました。

「そうでしたか」

おにさんはちよっと考えてから、

「くまのお母さん、それならこれがおすすめです」

と、ケースの中からモンブランを取り出しました。

「この中には、森のひろばで集めたくりが、どっさり入っているんですよ」

くり、と聞いて、くまのお母さんがにっこりしました。

「くりは私もこの子たちも大好きなんです。でもこの子たちを連れていくなかなかひろいに行けなくて」

「なあなあ、このモンブランの上のこれをじっして」

おにさんは店のおくから大きなびんを持ってくると、中みをスプーンですくいました。それからそれをたっぷりとモンブランの上にかきました。

「くんくんくん、いいにおい」

「くんくんくん、ほくこのにおい知ってるよ」

「ほくだっしてってるもた」

ふたごの子ぐまは、もうおおさわぎ。二ひきどっして

「はちみつだー」

と、びんの中みをあてました。

「はいそうだよ。さあこれを食べるとぐっすりとねるんだよ」

おにさんがモンブランの入ったはこをわたしました。するとお母さんぐまはなにやら茶色い紙包みをおにさんの手につつませました。そして、

「おにさん、ありがとうございます」

と、子ぐまとっしよに森への小みちを帰っていきました。

「ありがとうございます」

おにさんは白いぼうしを取って見送りました。

「いじめんくだら」

もうすぐおひるといっう時に、小さな声がドマのとこまで来たよつでした。

クッキーの生地をねっていたおにさんが振り向き、だれもいません。

「おかしいなあ、だれかの声でしたようだけど」

おにさんがケースのむこうをのぞきこむと、

「ごめんください、あのわたしです」

ケースの前にちよこんと立っていた、いえ止まっていたのは一匹のクロスズメバチでした。よくみると糸のように白い細いハチまきをあたまにしめています。

「いらっしやませ、女王バチさん、新しい巢のすみごちはどうですか?」

ケーキ屋のおにさんは、三日前の昼に女王バチが新しい巢につつたのをみかけたのでした。

すると女王バチが、がっくりとあたまをたれたようにみえました。白いハチまきはゆかにつきそうでした

「あの、それをきかないでくださいな」

ますます小さな声で女王バチがいました。大きな目には、なみだがハチきれんばかりにあふれています。

「つかれているようですわね」

おにさんが声をかけると、

「そうなんです。わたしにはもったまこを産む力がないのです。それというのもあの音ですわ」

「音? ですか?」

「はい、ケーキ屋さんには聞こえませんか? この二日かんとつもの、森のおくからきこえてくる、あのウオーンウオーンという音。いったいぜんたいなんの音なんでしょう」

「ああ、あの音ですか。たしか森のおくに環境ちよつさのための機械をおくと役場の人がいました、それではないでしょうか?」

「うか?」

「そうなんですか。なにしろあの音がすると、わたしのあたまがキリキリさしこまれるようにいたむのです。しかもひっきりなしにウオンウオンですからねえ」

「それはそれは。ひっきりなしですからねえ」

「わたしもう、たまごを産む気にもなれません。女王バチはやめさせていただきます」

「そうでしたか」

おにいさんはちよつと考えてから

「女王バチさん、それならこれがおすすすめです」

と、ケースの中から木いちじこのショートケーキを取り出しました。

「さあ、木いちじこのショートケーキです。この木いちじこは夏の初めに森の中でつんだものですよ。わたしがれいとうしておいたのです。夏の光と風と朝つゆがたっぷりはいっていますよ。召し上がるときっと元気になれますよ。そしてこれは特別に女王バチさん」

「そういつと、おにいさんはショートケーキの上に木いちじこをどっさりとのせました。」

「はいちよつぞ。」

おにいさんは木いちじこのショートケーキをおさらけのせて、ケースの上におきました。女王バチは、ヒラリとまじあがる、山盛りの木いちじこ口をつけました。

「たしかに夏の森の味がします。」

と言ったかと思つた、そのうち木いちじこにまた手をうめて、ガツガツと食べ始めました。

そして、「あつがうつ」といひつたおたまをひらひらする、

ヨタヨタと飛んで店を出て行きました。重くなったお腹のせいでしょうか。後にはハチまきと小さなオレンジ色の紙包みが落ちていました。

おにいさんはこの二つをひるうつと、

「ありがとうございます」

と見送りました。

夕方、おにいさんが店のかんばんを外している時でした。

「ああよかった。まにあつた。」

と、後ろで声がありました。

ふりむくと二羽のセキレイが、店の前のえだにとまっています。

「いらつしゃいませ。さあどうぞおはいりください」

セキレイは二羽とも大きなマスクをしています。

「どうしましたか、セキレイさん」

おにいさんが聞くと

「いえいえどうもこのセキがとまらぬのです。」

「どうも、苦しくてたまりませう」

「いけませんねえ。なぜがやっつてくるのかい」

「え、いやはやどうも、そうですか。」

「そういつとセキレイたちは、店の中でゴホンゴホンとセキを吐きました。マスクが今にもとびそうでした。

「なになにちよつとね、おいしいものはまた入らない。いやはや

なにしろ、なおりませと

「あしたは結婚式というのに」

「二羽のセキレイはケースの中をのぞきました。」

「あいにくすねえ、今日はほとんどつれてしまつたんですよ。」

クッキーとシュークリームしか残っていないんです。

おにいさんがもうしわけなきそうに言いました。

ケースの中にはシュークリームが一つ、クッキーが二枚ある

だけでした。

「シュークリームですか。それはいい。わたしたちのたいこつぷ

つぷすよ」

「それはちよつとよかつたです。そうだとちよつとお待ちください

いな」

「そういつとおにいさんは、緑の葉っぱを店のおくから出してき

ました。

「なあ、これはよくききますよ」

「なんですかそれは」

「これはカモミールの葉っぱです。セキにはよくきくんですよ」

「そういつとおにいさんは、ほうちよつと葉っぱをトントンと細かくすると、クリームと混ぜて、シュークリームの中にくわえ

ました。

「さわやかなかおりが、夕方のお店に伝がりました。」

「なあ、どうぞセキレイさん。明日はいい結婚式になりますよ」

「いやはやどうも、これはまつたくおりがたい」

「なんだかそのにおいでセキもおさまつていくよつな気がします」

「二羽のセキレイはうれしそうでした。」

「おれいす」

「そういつと、黄色い紙包みをおにいさんにわたしました。それからシュークリームを首にゆわえてもらつと仲良く帰っていき

ました。」

「ありがとうございます」

おにいさんはエプロンを外しながら、森へ向かつておじぎをし

ました。

夜、だんろの前で、ケーキ屋のおにいさんは、のこつた二枚のクッキーを食べながら、茶色とオレンジと黄色の紙包みをつり出

しました。

茶色の紙包みはくまのおかさからでした。

なかみは真っ赤なりんごでした。

つきは女王バチさんからのオレンジの紙包み。

なかみはなんとローヤルゼリー。

さいごはセキレイさんたちがくれた黄色の紙包み。

「なにがでてるかな？」

おにいさんが開けてみると、セキレイさんが南の島から運んで

きたパニラのさやがありました。

お兄さんの目が輝き出しました。

「ふんふん、これはいいぞ！これをどうしてこつすと。よし、あしたからはアップルムースをつくってみるぞー」

森のいりぐちの小さなケーキやさんに、新しいおかしが誕生したよう

ゆきのふるひ

すだ ゆり

おつきから、ヒカリはなんども、まどの雪をおとしに外に出ました。けれども、どんなにおとしても、雪はすくへばりついて、ヒカリがやっとへやにもとって、まどから外を見ようとするともう、窓には雪のペールがかかっているのです。

ヒカリのいえは、バスのていりゅうじよのまえのパンやでした。バスのていりゅうじよといっても、町のはずれでしたから、めったに人のりおりのないさびしいところでした。ヒカリは、まどの雪をおとしに外に出ると、ついでに、バスでいについた雪もきれいはらいました。そうでないとは、バスにのるひとがこまるからです。そうでないとは、そこに、「キオバケがたっているように、こわいからです。

お父さんとお母さんは、おじいさんのお見舞いに行ったきりです。ひるまでには帰ってくるといったのに、いつまでたっても帰ってきません。雪はひどくなるいっぽうで、外はうす暗くなってきました。はじめてのおるすばんはともさびしく、たよりないものでした。

なんどめかにそとにでたとき、ヒカリはびっくりしました。あんなへんぴなところでそんなにたくさんパンが売れるとも思われません。

おじいさんはさいふをだすと、
「いちばんおいしいパンをひとつくれるかな」といいました。

ヒカリはジャムパンをケースからだしておじいさんにわたしました。それがいちばんすきなパンだからです。

「いくひかな」
けれども、ヒカリにはまだじがよめません。だまっているとおじいさんはパンのまえにかいてあるねだんをみて、ヒカリにひやくえんをわたしました。

「はやく、ストープにあたってください」
ヒカリはじぶんようの、ちいさないすをストープのまえにおいて、おじいさんの手をひっぱりました。おじいさんは用心深くいすにこしをおろすと、てぶくろをとって、ストープに手をかざしました。

「うちのおいしいパンをたべてください」
おじいさんは、わらってジャムパンにかぶりつきました。
おじいさんはみみをすませました。ストープのなかでもえる火のおとと、窓をたたくぶぎの音がいはい、何も聞こえません。

「おうちのひとは、パンをやっているの？」
「ううん、パンを売りに町までいったの」
ヒカリもジャムパンを持ってくると、床にべたんとすわって食べ出しました。

たまのつべんからあしのさきまでまっしろな、ユキオバケがたっていたからです。ヒカリがおどろいていると、ユキオバケは「海にいくバスはこれでいいのかい」といいました。よく見ると、ながいコートをかきたおじいさんでした。

たしかに、海に行くバスはこれでいいのですが、一日に4ほんしかありません。それもさつきいつてしまつて、あと、2じかんはまたなければなりません。

「バスがくるまで、おうちのなかでおあたりなさい」
ヒカリはおとなみたいにそういつて、おじいさんのてをひっぱりました。おじいさんはちよつとこまったかおをして、まどにこにいえのなかをのぞきこみました。

「いいのよ。えんりよしくなくていいの」
「こないなの、とくにこんなぶぎの日に、だれかがくるなんて、めったにないことです。

それに、おじいさんの手は、ふるえるほどつめたくて、早くおじいさんをあたためてあげなくてはなりません。

おじいさんは、ぱたぱたと音をたててふくについた雪をはらうと、ぼうしをとって、とをあけました。どこかで見たとのある、なつかしい気がしましたが、ヒカリにとって、今はそれどころではありません。

「おうちの人はいいいの？」
「いま、パンをやっているの」
パンのケースの中にはまだいっぱいパンがはいっています。

「おじいさんは、どこからきたの？」

おじいさんは、くちにほおばったパンをのみこむと、

「これから海に行くんだよ」と、言いました。

「町から来たの？」

「そうだよ。あんまり遠くて、忘れそうだったよ」

「なにを？」

「一回ここにきたことがあるんだが、あんまり昔で、まよつてしまったよ」

「ここへきたことがあるのね」

ヒカリは満足そうにうなづくと、ジャムパンをすっかりたいらげました。おじいさんはポケットからハンカチを出すよ、

「見てごらん」と、言いました。

おじいさんは、ハンカチをつひにおもて「とひひひら動かして、そこに何もないことを見せるよ、」

「はいっ」
と叫んで、ハンカチのしたから、ちいさなオルゴールを取り出しました。

茶色の木箱の上にピアノが乗っていて、おじいさんがピアノのあかいはなを押すと、音楽を奏でながらくるくると回り出しました。それを見ると、ヒカリは今までのさびしさをすっかり忘れてしまいました。

おじいさんは、店の奥にオルガンを見つけると、そこへ歩いて

いって、ピエロのオルゴールに合わせて、オルガンを弾き始めました。それは、いつもお父さんが弾いてくれる曲でした。

ヒカリがオルゴールをもっておじいさんのところへ入っていくとしたとき、電話のベルが鳴りました。

電話はお父さんからでした。

おじいさんがなくなつたので、今から迎えに来るといいました。

ヒカリは、嬉しいような、悲しいような、やっぱり悲しくて、泣き出しました。

おじいさんは、オルガンを弾くのをやめて、ヒカリを抱き上げて、歌を歌ってくれました。

いつもいつも、お父さんが歌ってくれる歌です。

やがて、バスが来ました。時間には少し早いようですが、中には大勢乗っていて、みんな白い服を着ていました。

おじいさんはぼうしをかぶり、白いコートを着て、バスに乗り込みました。

ヒカリはとても悲しくなりました。行かないでといいました。

おじいさんはとても喜んで、バスから降りてくると、ヒカリを抱き上げて、何度もほおすりをしました。

それからもう一度バスに乗ると、ドアが閉まってバスはいってしまいました。

バスと入れ違いに、お父さんが迎えに来ました。ヒカリが泣いていると、お父さんは、さっきのおじいさんが歌った歌を耳元で歌ってくれました。

「おじいさんがきたよ」

と、ヒカリが言うと、お父さんはもっと大きな声で歌いました。ヒカリはお父さんの首にしがみついて、ぐりぐりと頭をこすりつけました。

風に乗って

すだ ゆり子

6月の8日、読書ボランティアのおばさんのつまらない話が終わって、ぼんやりと外を見ていた時だ。

隣の席の健ちゃんが、紙を投げてよこした。小さく丸めてあって、建ちゃんは、手で広げるマネをした。

来週の日曜日、サイクリングに行こう

青天の霹靂。あたしはびっくりして、健ちゃんを見た。

「二人で？」

「ちげえよ、達哉に、耕司に清と、俺だよ」

二人じゃないと聞いて、ちょっと安心した。

「いいよ。何処へ行くの」

「野辺山まで行くのつかと思ってる」

野辺山といえば、自動車だつて四十分はかかる。

「OK」

あたしはさりげなく、返事をして、それから、体がつかつかしてきた。誰にも言っていないけど、健ちゃんはあたしの憧れの人だった。

あたしは休みのベルが鳴るのをひたすら待った。そして、ベル

が鳴ると同時にミサの席に飛んでいった。ミサは何でも話せる親友だ。

「ねえ」

今まで押さえていた感情があふれて、あたしは言葉が出なかった。

「何れ」

ミサは、怪訝な顔であたしを見た。

「健ちゃんたちに、サイクリング誘われた！」

とたんにミサは、大笑い。

「あんた！ 自転車乗れないじゃん！」

そうなのだ。あたしは自転車に乗れないなんて、口がさけてもい

でもない、行きたいよ。自転車に乗れないなんて、口がさけてもいえない

授業中はじつと気配を消していて、体育と、もし点数をもらえるなら、給食だけが五だなんていうあたしが、自転車に乗れないなんて、死んでも言えない。

「断つてきなよ」

ミサは、冷たく言い放った。

そういわれても、簡単には諦められない。

「ねえ、教えてよ。自転車」

ミサは、あたしをじつと見つめた。

「無理だよ。絶対無理。十日で、自転車に乗れたとして、野辺山でしょ？ 何時間かかると思ってたよ」

あたしは、口を尖らせた。

「それに、あんた、自転車乗れるようになると思っ」

あたしは小学校の時、自転車に乗っていて、自動車にはなられた。足を折る大怪我で、3ヶ月も入院したんだ。それがトラウマで、それ以来、自転車を見るのも怖かった。ミサはその時も同じクラスだったから、よく知ってるんだ。

「克服する」

ミサは呆れたように、肩をすくめた。

「時間ないよ」

本当に乗れるんだろうか、なんて思っ余裕もない。乗るしかないんだ。

部活のない日を、自転車の練習日にした。

十日の木曜日、急いで家へ帰ると、ミサが自転車に乗ってやって来た。

「乗ってみなよ」

あたしは自転車を持っていない。自転車に触るのは事故以来だった。

冷たい感触に、あの時の、あの瞬間がよみがえった。あたしは、ハンドルを握ったまま震えだした。

「やめておきなよ。つらいだけだよ」

ミサがあたしをはねのけて、ハンドルを奪った。

「もういいよ。あきらめなよ」

あたしは、震えながら、そこにしゃがみこんだ。

その夜、夢を見た。

ものすごくいい天気だった。歌なんかも歌っていたかもしれない。まるで、風になったように、あたしは自転車に乗っていた。

そしたら、いきなり突き飛ばされて、自転車から投げ出された。真っ赤な光が、空から降ってきて、そのまま何も見えなくなった。

長いこと忘れていた恐怖がよみがえって、あたしは眠りながら、叫んでいたかもしれない。ハッと目が覚めて、それきり、眠れなくなった。

明日は、断ろう、そう思った。

運動神経しかない私の、屈辱の日になるんだ、そつだ、最悪の敗北だ、そう思うと、その方がずっと悔しかった。

次の日、学校へ行くと、健ちゃんが嬉しそうに、サイクリングの行程表をくれた。

朝、6時に学校を出発。後は気の向くまま、体力の続く限り走り続ける。

弁当はおにぎり。各自飲み物持参。おやつは沢山

あたしは思わず笑ってしまった。なんていう、いい加減な行程表だ。健ちゃんって、こんな人だったんだ。

あたしは、言えなくなって、もう一度、自転車に挑戦しようと思った。

ミサは、自転車に乗って家へ来ると、とても思いつめたように、あたしの前に降り立った。

「やっぱり、やめたほうがいいと思う。危険だし、辛いし、あたしは耐えられないよ」

あたしは黙って、ミサの自転車に手をかけた。昨日ほど、震えは来ない。何とかなるかもしれない。

健ちゃんとの夢のようなサイクリング、そして、あたしのメンツ。

自転車にまたがってみる。怖い気持ちに変わりはない。思い切ってペダルを踏んでみる。

自転車は、ぐいっと動いた。あたしはあわてて足をついた。そして、そつと自転車をおりた。

「よくやったじゃん。動いたね。物凄い進歩だよ。明日も頑張るよ」

ミサは、わざと明るく言って、あたしの肩をたたいた。なんてだろう。遠い昔のことなのに。どうしてこんなに怖いんだよ。

次の日も、ミサはさつそつと自転車をやってきた。ミサはきつつか諦めるだろうと、そつ思っていたに違いない。

あたしは、ミサの自転車にまたがった。右足でペダルを踏むと、右に倒れそうになり、左足でペダルを踏むと、左に倒れた。そうやって、まるで、カタツムリみたいに、一足ずつ自転車が進んでいった。

ミサは、心配そうに後からついてきた。口があたり、すぐに、もうやめなよ、って言ったと思う。でも、ミサは何もいわずに、黙ってついてきた。

あたしは一步一步、あっちへ倒れ、こっちへ倒れして進んでい

ったんだ。どうして、何が起こって、こんなに恐怖心にまけるんだるか、不思議だった。

そして、もっと不思議なことが起こった。水曜日夕方だった。何度が、カタツムリみたいに、足をつきつき、自転車を進めて行った時、自転車がスーッと走った。その時、

あたしはとても気持ちがいいと思ったんだ。でも、すぐに怖くなって、自転車から飛び降りた。

「やったね。もう少しだよ」

ミサが小躍りして、自転車のハンドルを押さえた。「どうしても、サイクリングに行きたい」

ミサは笑って、もう一度私に自転車を渡した。あたしは、何も考えずに、思い切りペダルをこいだ。あたしは確かに、自転車に乗った。風を切って、自転車が走った。

ミサは、慌てて追いかけた。でも、ミサは自転車に追いつけなかった。

「やったよー」

あたしは自転車から飛び降りて、胸をたたいた。息が苦しくて、興奮して、分けのわからない感情で涙さえ出た。

何度が自転車をこいで、思うように乗れるようになって、やっとあたしには分かった。この脚力では、どうしても健ちゃんたちに追いついていられないことが。

学校へ行くと、真っ先に健ちゃんの所に行った。そして言った

水色おばけ

中嶋 直人

一時間目休み。

ぼくは一年三組のきょうしつを飛び出して、うづかを力いっぱい走った。

『このくらい、もてるよつになれ』

ミミズをつき出す、けんちゃんとうっちゃんのくぐらしいかおがおもいうかんだ。

(ミミズなんか、さわるもんか)

ぼくは三がいまでかけ上がった。

学校たんけんするとききた、しりょうしつにけむい、すみとのたなのかげにすすくまって、ないた。

(ほいくえんのころから、すすとだ。)

けんちゃん、やなことばかりいって。

よっちゃんは、けんちゃんのそばにいるとおもって、いばって

(さ)

ぼくはどんどんはらがたつてきて、

「けんちゃんなんか、しんじやえ。

よっちゃんなんか、きえちやえ」

足もとにある、小さな木のはこをけとばした。はこはいきおいよくころがっていくと、かべにぶつかって、パカッとふたがあらた。

「チャリン」

中から、なにかころがり出た。

ひろってみると五ひゃくえんだまくらいの大さのまるいかがみだった。

ぼくのほつぺたがうつった。

なみだのあともうつった。

すこしかたむけると、天じょうがうつった。

そのときだった。

水色っぽいものが、さつとちぎった!? …… ような気がした。

(えっ! なに?)

上を見た。はい色の天じょうのほかは、なにもなかった。そのとき、

「さるはいつちにけてきたぞ」

けんちゃんの声がかえった。

ぼくはひざをかかえて、じっと耳をすました。足音が入口のところでとまった。

(くるなー)

かがみをもった手に、ぐっと力を入れたき、

「キーン、コーン、カーン、コーン」

休みじかんのおわりのチャイムがなった。

パタパタと足音がとあくなっていく。

(はあー、たすかったあ)

かがみをポケットに入れて、しりょうしつを出た。

その日の夕ごはんのときだった。

たける兄ちゃんがいった。

「おまえ、きょう、けんたとよしおに、おいかけられてただろ」

ぼくはとび上がるほどおどろいた。

「えっ、なんでしってるの」

「おれ、見たぜ。まったく、あんなのけんかして、やつつけちまえばいいんだ」

「ひっ!!」

「ひってなんだよ」

(じょうだんじゃない。けんちゃんはクラスで一ばんつよいんだぞ)

「たける、へんなことをおしえるんじゃないよ」

ママの声に、

「だって、これから六年まで、ずっとやられるかもしれないねえだろ。」

「うしろむき」

兄ちゃんはいぶんのちやわんとはしを、ながしにはこんでいった。

ぼくは学校にいきたくなくなってきた。

「あ、そつだ。いじつとめてやめろ」

兄ちゃんはいぶんのうしろにもどってきた。

「ずっとむかし、学校で、いじめっ子においかけられた男の子が、

二かいのまどからおつこちてしんじやったんだと。

それからは、青いきものをきた男の子が、かがみにうつるのが見えることがあるんだってよ」

「ええっ!!!」

ぼくの大声に、兄ちゃんはびくつときた。

「おいおい、そんなにびくくりするかあ。ああ、あせったあ。」

それでな。なん日かして、いじめっ子もトイレのかがみのまえでしんでたんだってさ。きつと、しかえしをしたんだな。

いまでも、こまったときやいじめられたとき、そのおばけにおねがいすると、たすけてもらえるんだとよ。

おまえもさがして、たすけてもらったら?」

とくいそうにしている兄ちゃんに、ママがいった。

「また、いいかげんなことを」

「いや、ほんとうだって。うちの学校の七ふしぎの二つなんだが。」

兄ちゃんはいやにやして、へやにいった。

(そうかあ、そうだったんだ。

だからあのとき、チャイムがなったんだ。

それだけじゃないよ。

さんすうも本をわすれたけど、じゅぎょうでつかわなかったから、先生にはれなかった。

きゅうしよくのすぶた、ぼくのカップに、きらいなピーマンが入っていなかった)

ぼくはポケットの中のががみをにぎった。

「がんばれ」

みんなの声もきこえて、ますますあせった。

ぼくは、水色おばけにたすけてもらおうと、ポケットに手を入れようとした。

そのときだった。

ぼくの手を、けんちゃんのおったかい手が、がっちりつかまえた。

ドキッとして、けんちゃんを見た。

けんちゃんはまえをむいたままだった。

「いいか、目のまえをなわがとおろしたら入るんだ」

「うん」

けんちゃんは、なわにあわせていった。

「せえ、ので、もっ、てー」

けんちゃんといっしょに走りこんだ。

(入れたー！)

「とへ」

とび上がると、なわがとおろすぎた。

(とへたー！)

「にげろ」

でも、ひだり手になわがひっかかた。

「にげるのもわすれんな」

けんちゃんはわらった。

「とへ」

ぼくもわらった。

そのとき、先生の声が出た。

「へえ、けんたがねえー」

けんちゃんをあわてて手をはなした。

「さるがとへねえと、おれたちビリだからよ」

さよならをしたあとしりょうじつにいった。かがみを見たけれど、

水色のものはつつらなかつた。

(いままで、ありがとう。)

ぼくは、もつたすけてもらわなくてもいいよ。……たぶん

はこの中にかがみをもとじて、しりょうじつを出た。

あとがき

「まいぞうきん」第2号をお届けいたします。

平成22年度も、たくさんの方が、とつげの旗編集室に届きました。そして、申し訳ございません、それらすべての労作を、とつげの旗に掲載することができませんでした。

それゆえの未掲載作品を集めたこの「まいぞうきん」第2号ですが、「編集室の風」4号に記しました理由で、一部、掲載されない作品がありますこと、ご了承ください。

さて、来年度は、「とつげの旗」節田の年です。

子どもたちに今せひとも読んでもらいたいお話、作家入魂の力作など、お待ちいたします。

(松永)

「とうげの旗」編集室の

まいごうきん

平成22年度

発行 平成23年3月1日
製作 「とうげの旗」編集室
印刷 日光企画